

【漁況】

[マアジ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成23年も16万8千トンと低調に推移しました。

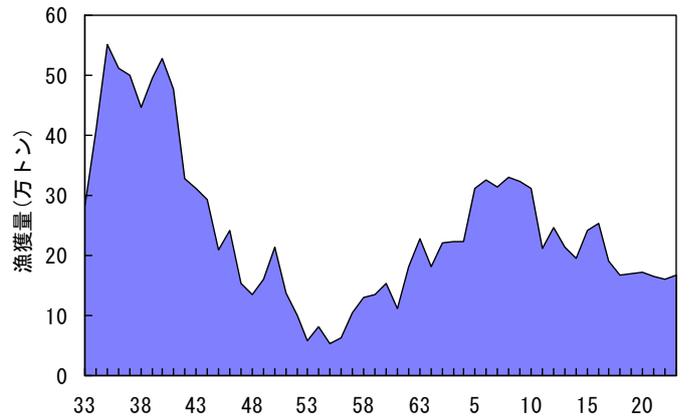


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成 25 年 1～3 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、野間池沖、牛深沖での散発的な漁獲に留まりました。

薩南海域では、3月に内之浦沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ仔、豆（1歳魚：平成24年生まれ）主体に522トンの水揚げで、前年の60%及び平年の51%と低調な漁獲となりました。

3. 平成 25 年 4～6 月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ豆・小（1歳魚：平成24年生まれ）でマアジ小・中（2歳魚：平成23年生まれ）も混じるでしょう。

来遊量は、前年・平年並となるでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

漁獲主体となるマアジ1歳魚は、これまで低調に推移していることから、前年、平年を下回ると考えられますが、2歳魚は3月に薩南海域で比較的好漁がみられたことから、全体としては、前年・平年並になると考えられます。

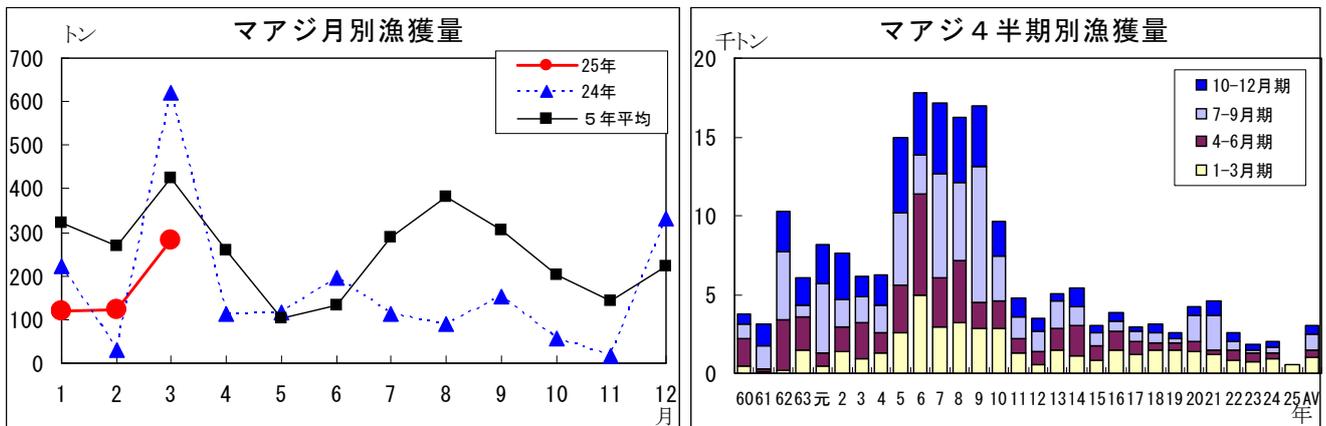


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成20～24年）の平均値(AV)、平成25年3月27日までの水揚量を使用

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トンにピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少しましたが、平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンまで増加しました。その後再び減少し、平成14年は28万トンになりました。平成17年・18年は再び増加しましたが、平成19年以降減少傾向にあり、平成23年は39万3千トンとなりました。

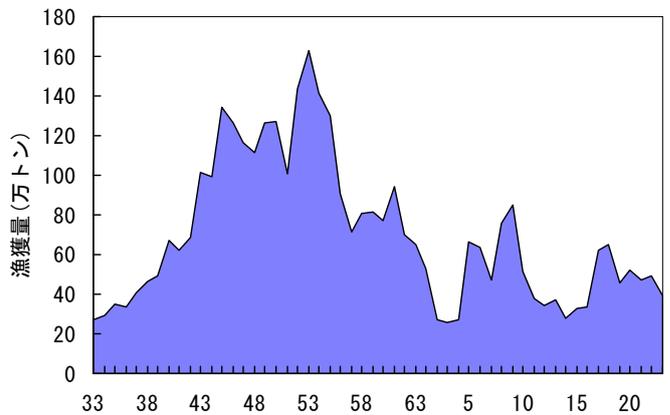


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 平成 25 年 1～3 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甌島西に漁場が形成されました。

薩南海域では、内之浦沖、種子島海域に漁場が形成されました。

4 港計のまき網では、北薩海域でサバ類小（1 歳魚：平成 24 年生まれ）主体、薩南海域ではゴマサバ中（2 歳・3 歳魚：平成 23・22 年生まれ）、ゴマサバ中小（2 歳魚：平成 23 年生まれ）主体に 5,559 トンの水揚げで、前年の 62 % 及び平年の 106 % となりました。

3. 平成 25 年 4～6 月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中（3 歳魚：平成 22 年生まれ）で、ゴマサバ中小（2 歳魚：平成 23 年生まれ）も混じるでしょう。

来遊量は前年を上回り、平年並となるでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

ゴマサバ 1 歳魚は、若干の来遊がある程度と考えられます。ゴマサバ 2 歳魚 3 歳魚は、これまで漁獲の主体となり漁獲が継続していることから、今期も平年並の来遊と考えられます。

4 歳魚以上の残存資源量はかなり減少しており、混獲される程度と考えられます。

以上のことから、低調であった前年を上回り、平年並になると考えられます。

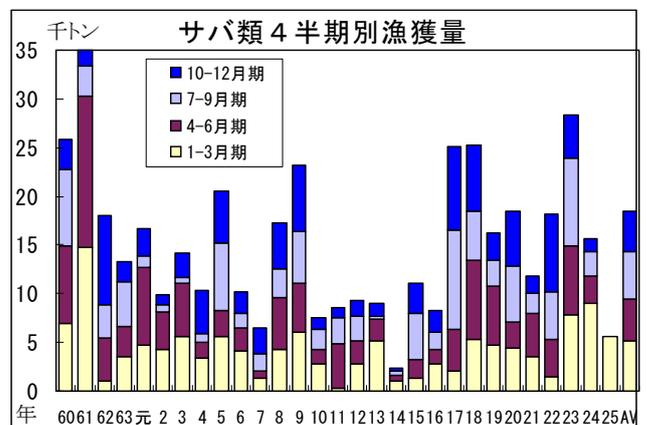
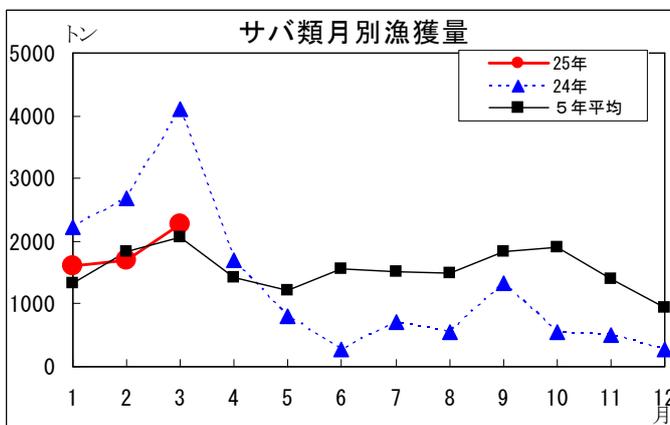


図 サバ類まき網漁獲量変化（4 港計）

※平年値は過去 5 年（平成 20～24 年）の平均値 (AV)、平成 25 年 3 月 27 日までの水揚げ量を使用

[マルアジ（アオアジ）]

1. 漁獲量の動向（水産技術開発センター調べ：4港計）

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しましたが、平成16年以降は低調に推移し、21年は過去最低の94トンとなりました。

22、23年はやや増加したものの、24年は247トンと再び減少しました。

2. 平成25年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

野間池沖、串木野沖が漁場となりましたが、期全体で58トンの水揚げで、前年の55%及び平年の46%と低調な漁獲となりました。

3. 平成25年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ豆（1歳魚：平成24年生まれ）、マルアジ小（2歳魚：平成23年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年を下回り、平年並となるでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

マルアジの資源水準は依然として低水準と考えられ、前期の漁獲状況から前年を下回り、平年並と考えられます。

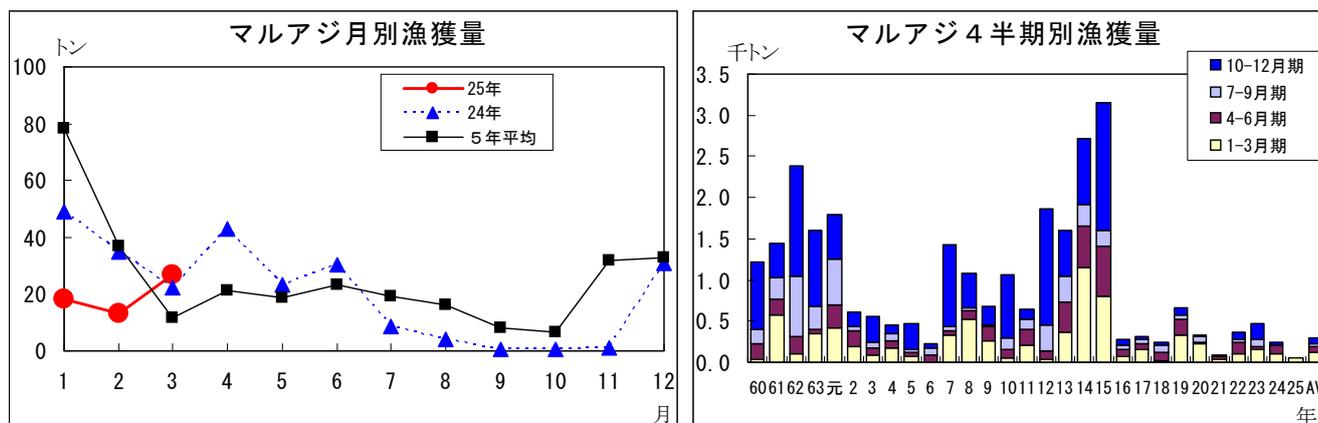


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成20～24年）の平均値(AV)、平成25年3月27日までの水揚げ量を使用

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から全国的に漁獲量は減少を続け、平成10年は16万7千トンとなり、その後さらに減少し平成14年は5万トンとなりました。

以降、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年は18万トンで10年ぶりに10万トンを超える漁獲がありました。

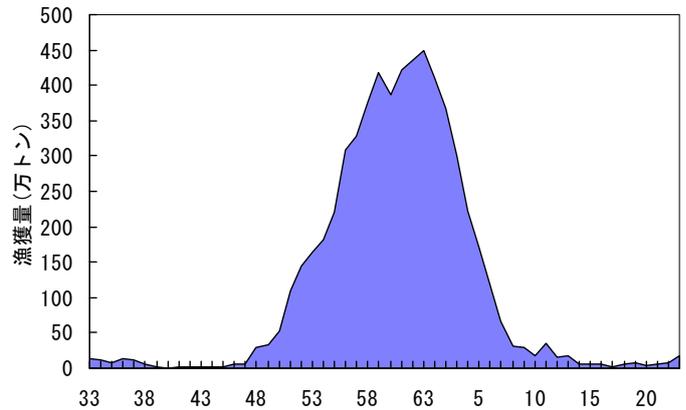


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 平成 25 年 1～3 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甌島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、野間池沖で漁場が形成されました。

北薩海域の棒受網では、川内沖～阿久根沖にかけてウルメイワシに混じり漁獲されました。

4 港計のまき網では、中羽(1 歳魚：平成 24 年生まれ)主体に大羽(2 歳魚以上)混じりで 329 トンの水揚げで前年の 159 %，平年の 359 %でした。

北薩海域の棒受網は、49 トンの水揚げで前年の 137 %，平年の 274 %でした。

3. 平成 25 年 4～6 月期の見とおし

漁獲の主体は、中羽(1 歳魚：平成 24 年生まれ)でしょう。

来遊量は前年を上回り、平年並でしょう。

(根 拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期の漁況から、今期の 1 歳魚の来遊も前期に引き続き好調になると予測されることから、来遊量は前年を上回り、平年並になると考えられます。

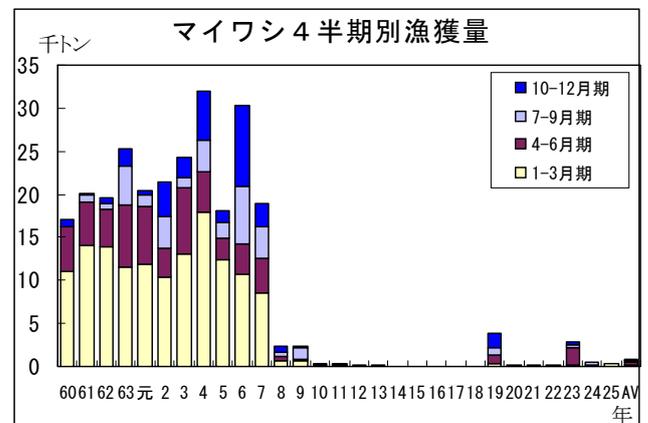
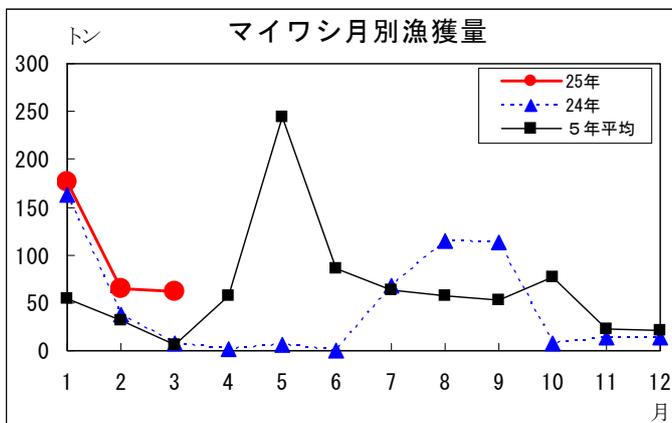


図 マイワシまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年（平成 20～24 年）の平均値(AV)，平成 25 年 3 月 27 日までの漁獲量を使用

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代から60年代にかけて3～5万トン前後で推移しました。

その後、増減を繰り返しながら増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりましたが、翌年以降減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トンとなりました。

平成15年以降は再度増加傾向となり、平成23年は8万5千トンと大幅に増加し、昭和33年以降最高の漁獲量となりました。

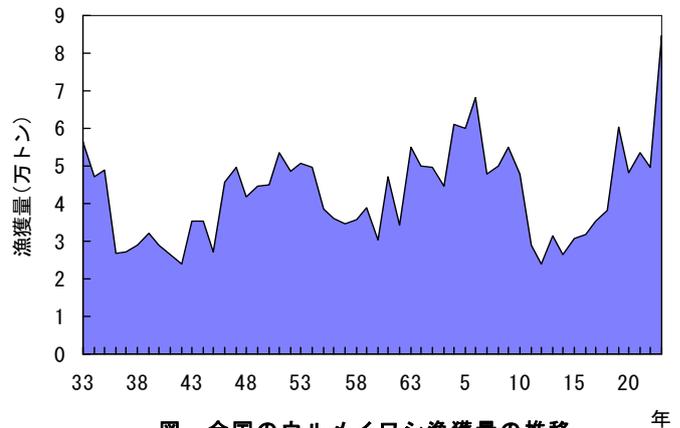


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成25年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甌島周辺に漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、野間池、立目崎沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、1歳魚（平成24年生まれ）主体に1,266トンの水揚げがあり、前年の178%、平年の131%でした。

北薩海域の棒受網では、川内沖から長島沖にかけて漁場が形成され、364トンの水揚げがあり前年の303%、平年の272%となりました。

3. 平成25年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、大羽（1歳魚・平成24年生まれ）になるでしょう。

来遊量は前年並で平年を上回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期は、1歳魚（平成24年生まれ）主体に2歳魚（平成23年生まれ）混じりで来遊があります。

前年の9月以降1歳魚（平成24年生まれ）主体に好調な来遊があったことから、今期も1歳魚主体に好調であった前年並の来遊が見込まれます。

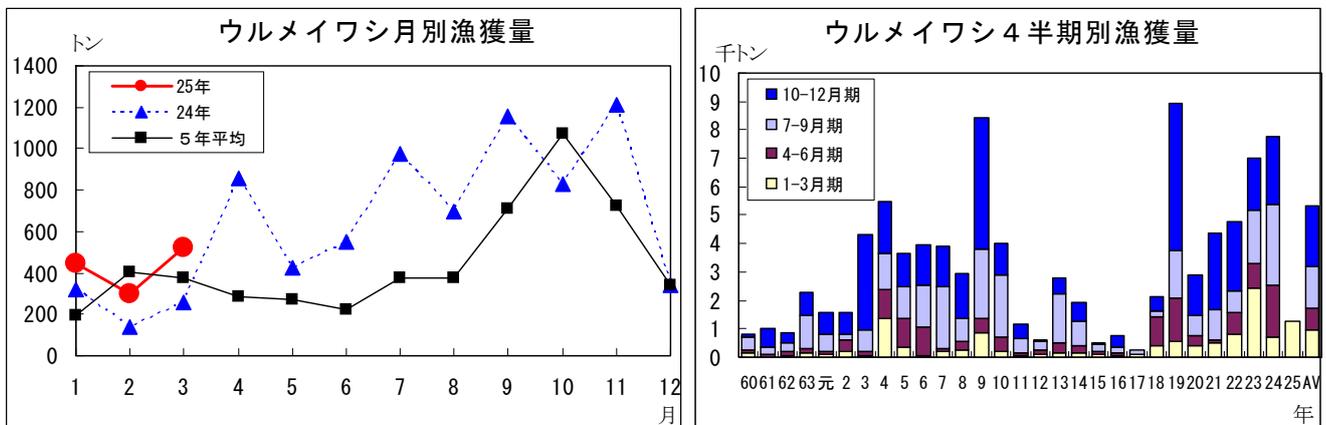


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成20～24年）の平均値(AV)，平成25年3月27日までの漁獲量を使用

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成23年は26万2千トンとなりました。

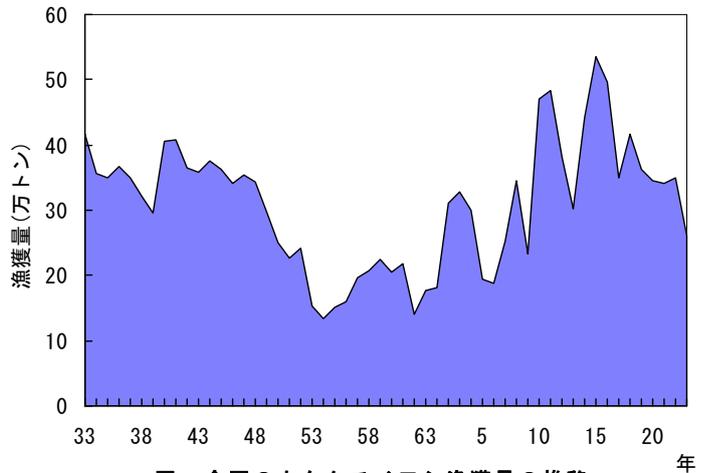


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成 25 年 1～3 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

4 港計のまき網では小羽，中羽（1 歳魚：平成 24 年生まれ）主体に 54 トンの水揚げで，前年の 74%，平年の 12% でした。

北薩海域の棒受網では小羽，中羽（1 歳魚：平成 24 年生まれ）主体に 129 トンの水揚げで，前年の 90%，平年の 107% でした。

3. 平成 25 年 4～6 月期の見とおし

大羽（1 歳魚・平成 24 年生まれ）が漁獲の主体で，後半は中羽銘柄（1 歳魚・平成 24 年生まれ）が混じり，来遊量は前年並で平年を下回るでしょう。

（根 拠）

現在の漁況と，西薩海域の昨年の秋季のバッチ網の漁況から来遊水準は前年並と考えられます。

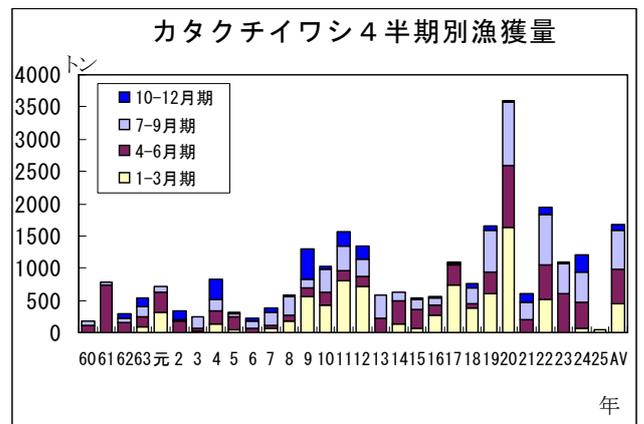
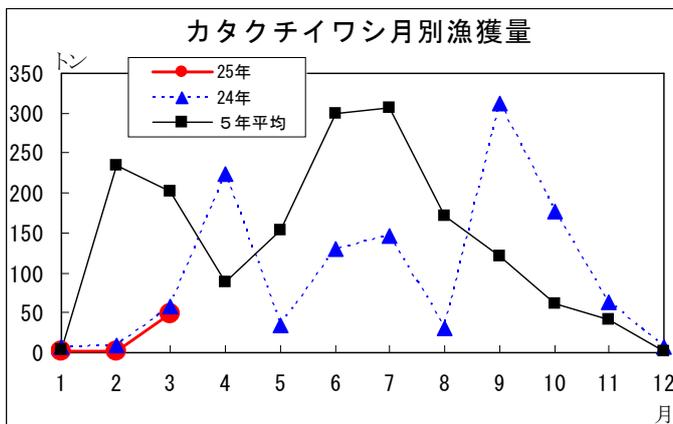


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4 港計）

※平年値は過去 5 年（平成 20～24 年）の平均値 (AV)，平成 25 年 3 月 27 日までの漁獲量を使用

[イワシ類参考資料]

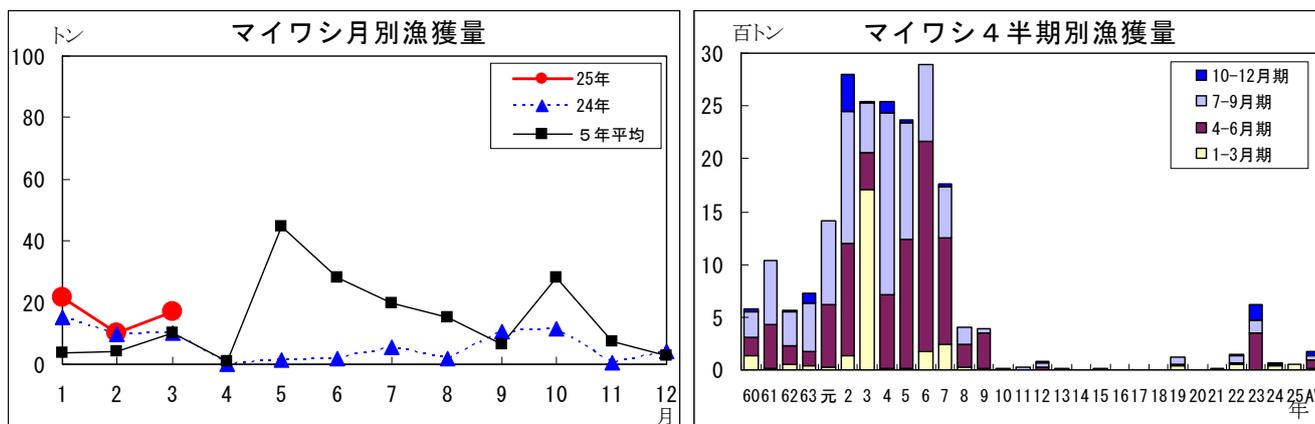


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

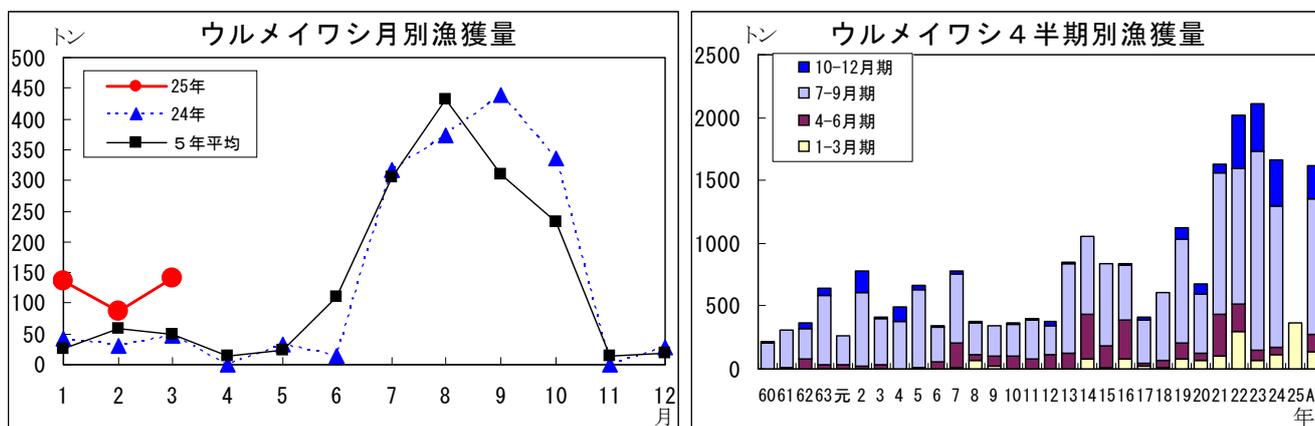


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

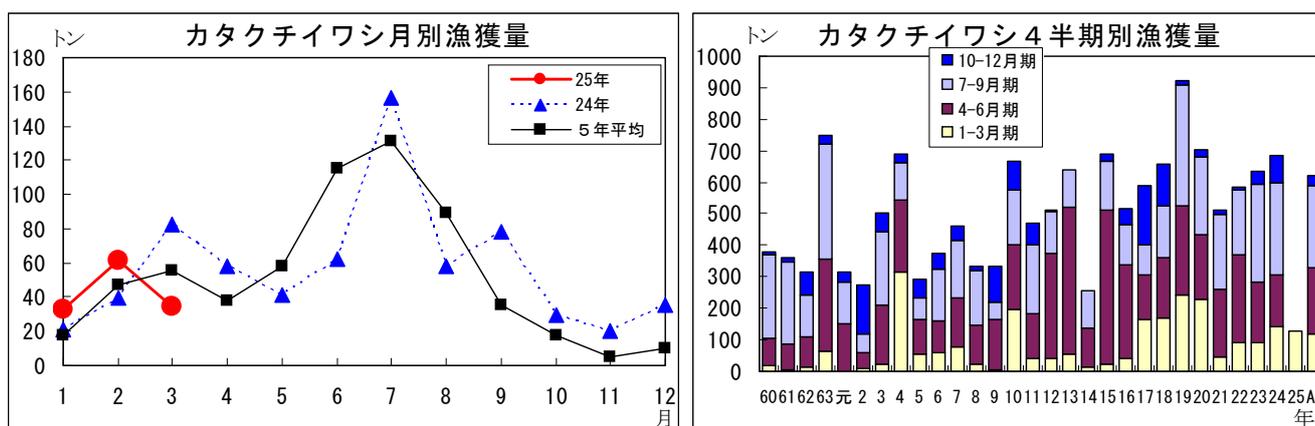


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年(平成20~24年)の平均値(AV),平成25年3月27日までの漁獲量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ，モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年変化及び平成25年1～3月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから4,500トンの間での推移しており、平成24年は3,200トンとなりました。

平成25年1～3月は、薩南海域では、クサヤモロ小、中小主体に漁獲され、期全体で727トンの水揚げで、前年の172%及び平年の120%となりました。

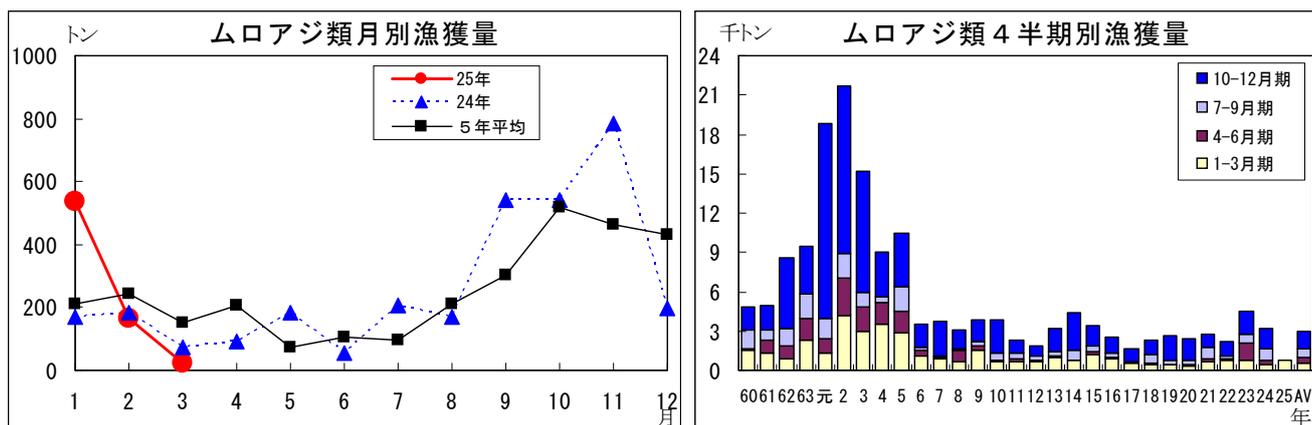


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成20～24年)の平均値(AV)、平成24年3月27日までの水揚量を使用。

〈オアカムロ(水産技術開発センター調べ：4港計)〉

1. 経年変化及び平成25年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに一旦減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年は2,291トンと一旦増加しましたが、再び減少傾向で平成24年は842トンとなりました。

平成25年1～3月は、薩南海域では、オアカムロ中小、小、豆主体に漁獲され、期全体で208トンの水揚げで前年の334%及び平年の45%となりました。

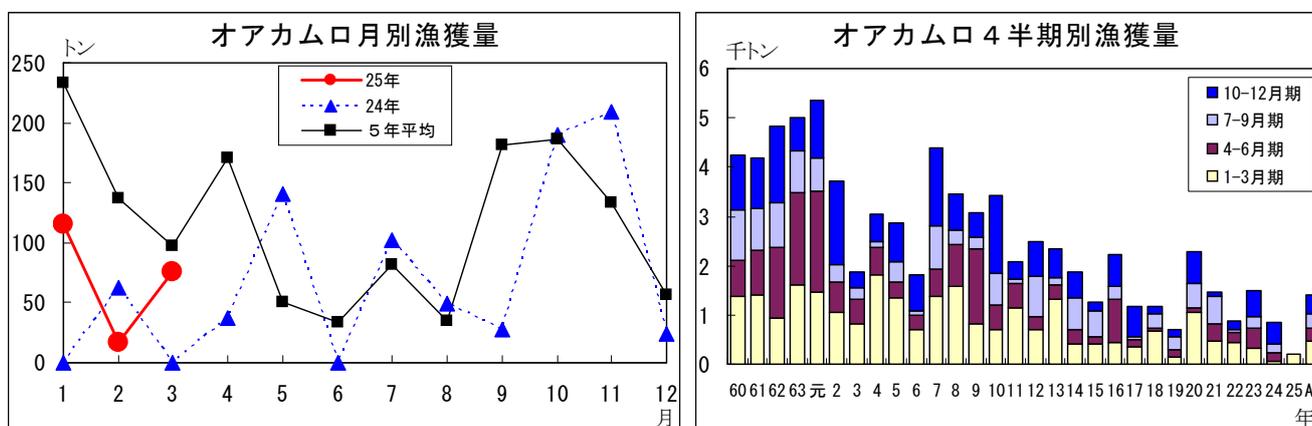


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成20～24年)の平均値(AV)、平成25年3月27日までの水揚量を使用